



清々しいほどの敗北の中

■ 八谷 和彦



今年の夏はアメリカに長期滞在するので、現在準備の真っ最中です。皆さん国際会議に参加することも多いと思いますが、私たち美術作家も同じように国際展に参加したりします。ただ、今回の渡米は美術展ではなく、実はエアショーへの個人参加なのです。

7月22日から28日までの7日間、ウィスコンシン州にあるウイットマン空港で巨大なエアショーが開催されます。イベント名はEAA AirVenture Oshkosh。全米各地から人と飛行機が来場し、会期中の参加人数は延べ60万人(コミケとほぼ同じ規模)、そして会期中に飛来する機体は1万機だそうです。

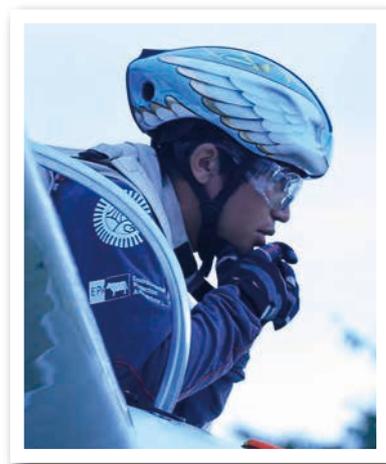
数字間違えたかな?とか思うじゃないですか。「飛行機が1万機」って。このエアショーを開催するEAA (Experimental Aircraft Association)は、もともと自作航空機愛好者の団体で、このエアショーもその性格上、全米各地から愛好家が飛行機で飛来して会場に駐機し、その横にテントを張ってこの「フェス」を楽しみます。「普通の人たちが普通に飛行機に乗る文化」、これをジェネラルアビエーション(以下GA)というのですが、この分野は、日本と米国でものすごく規模が違います。

たとえばICT分野は、米国が当然強い領域ですが、おそらく日本もまあそこそこイ線いってると思うんですよね。ただ、GAに関しては、日本は大人と子供なんてレベル差ではなく、規模で言えば300倍くらいのレベルで負けています。



■ 八谷 和彦
東京芸術大学美術学部先端芸術表現科
准教授

メディアアーティスト。九州芸術工科大学画像設計学科卒業、コンサルティング会社勤務。その後（株）PetWORKsを設立。現在に至る。作品に《視聴覚交換マシン》や《ポストベット》、ジェットエンジン付きスケートボード《エアボード》やメーヴェの実機を作ってみるプロジェクト《オープンスカイ》など。



むしろ清々しいほどの完敗なのですが、だからこそ面白い、とかも思っています。圧倒的な負けのなかでなにを出していくか。どうやったらこの状況から世界一を狙えるか？ 正攻法じゃ絶対無理ですが、自分たちの持ち味を活かせば、なにか勝負できるかもしれない。

今回僕の持っていく機体の飛行距離は 10km 程度、速度も時速 80km 程度とバイク並みです。しかしひとつ特徴があり、それは『風の谷のナウシカ』に出てきたメーヴェに、現行機で一番近い、という点です。そして、それを面白がってくれるアメリカの人たちの協力で、機体を展示し、デモフライトできることになりました。

メーヴェみたいな機体が成立する背景には「超小型ジェットエンジンが安く、個人でも入手可能になった」という背景があります。これ、80年代に 8bitCPU によるマイコンが出てきた状況とそっくりなんですよ。今、一人乗り超小型航空機は、小型ジェットエンジンとバッテリー&モーターの進歩とドローンの制御技術が入り、カンブリア爆発の前夜、な状態にあります。

どうです？ 自律制御、操縦補助、複数機体の連動……皆さん腕が鳴りませんか？ なんか勝負できる気がしてきませんか？ 日本からの参加は僕一人みたいなのがずっと続くと寂しいので、工学分野からも、超小型有人機分野で挑戦しましょうよ！というお誘いでした。